



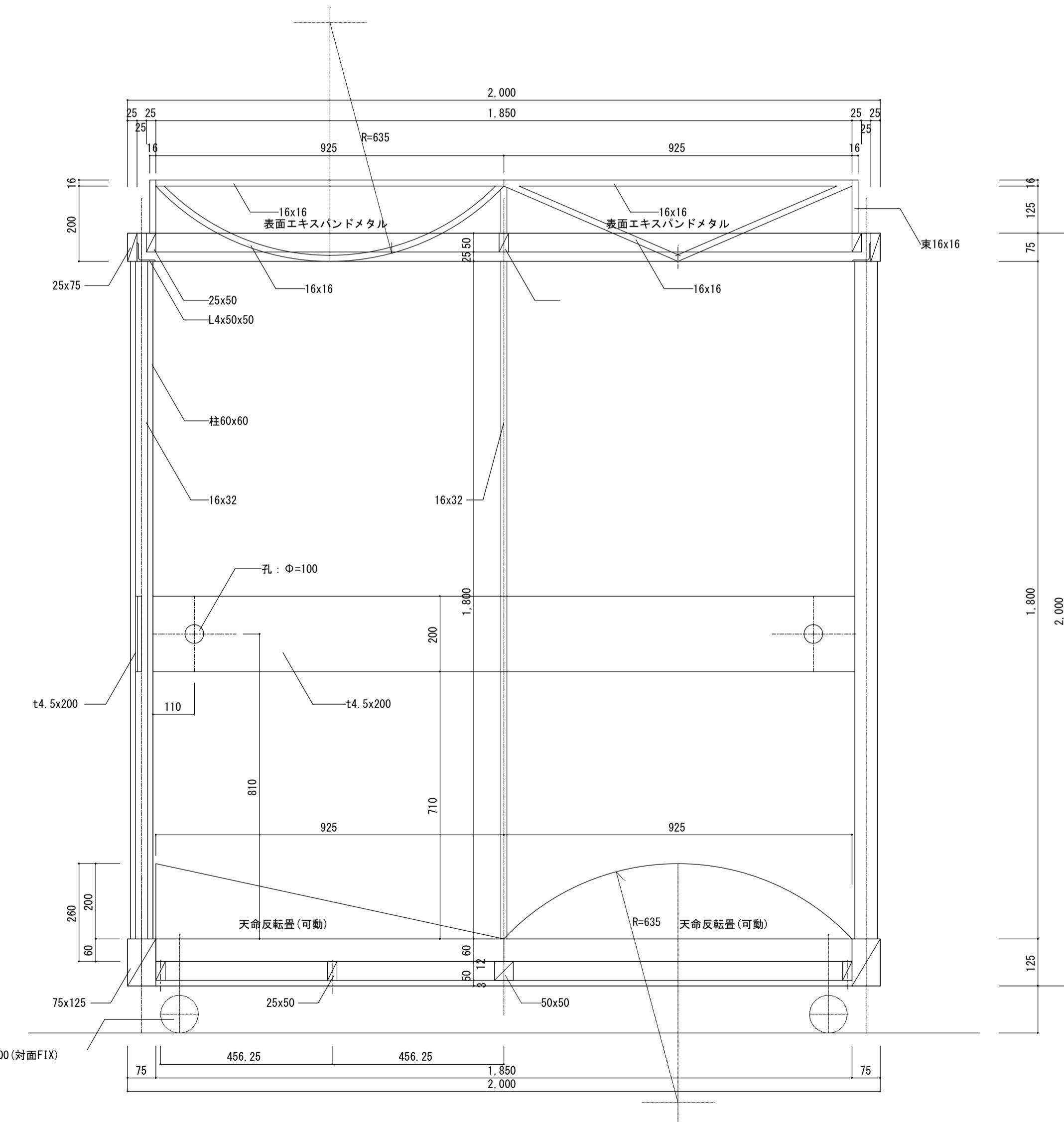
## 空間と身体感覚の相互作用にもとづく空間デザインの研究

# 容器 / 発生器 | 空間・場所 / 境界

設計：小野暁彦（京都芸術大学環境デザイン学科）

施工：HOTMETALSOUP 西川恭史、西脇畠敷物店

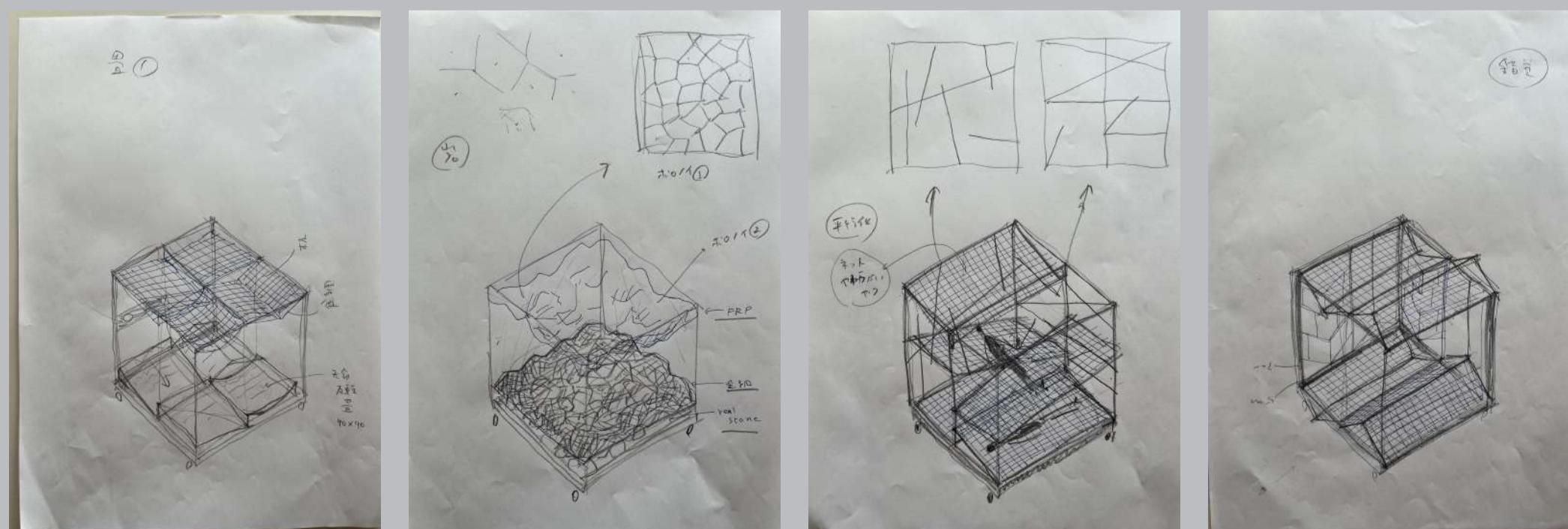
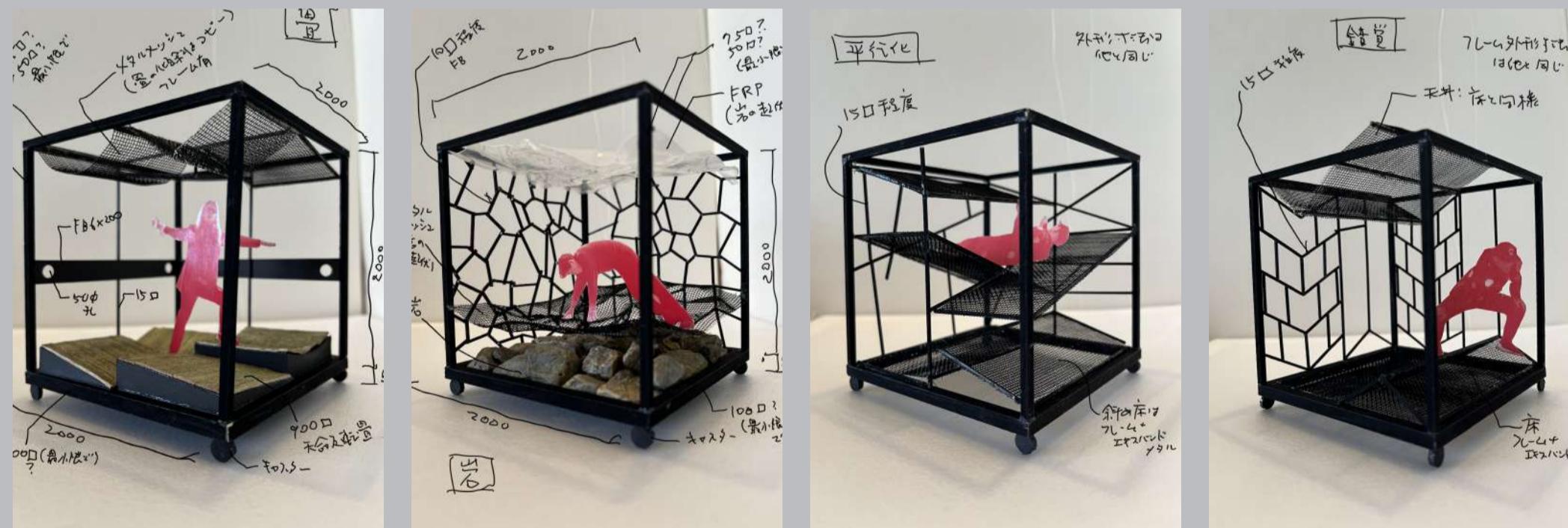
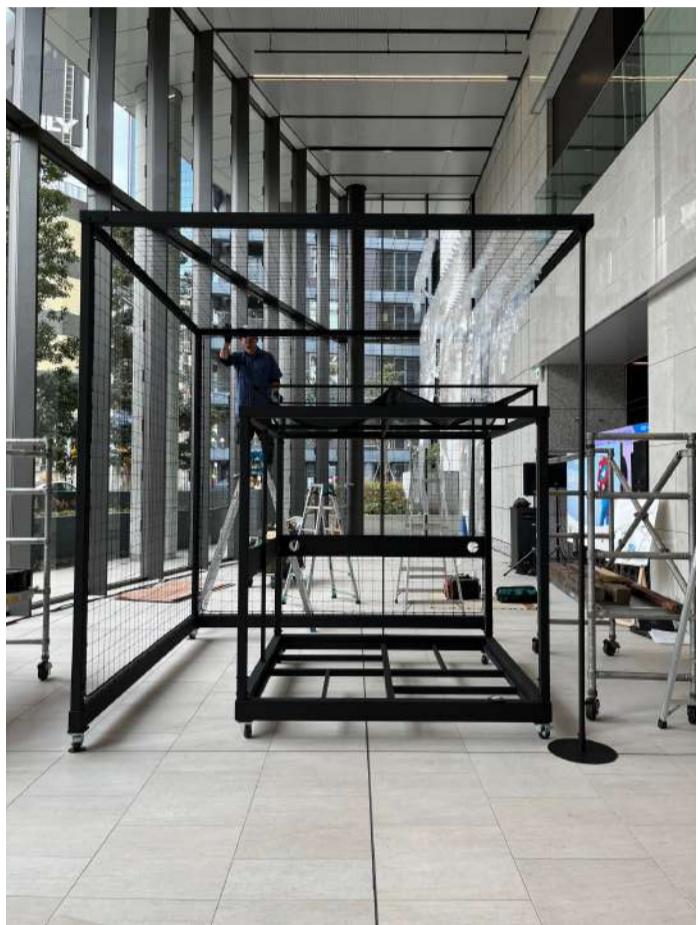
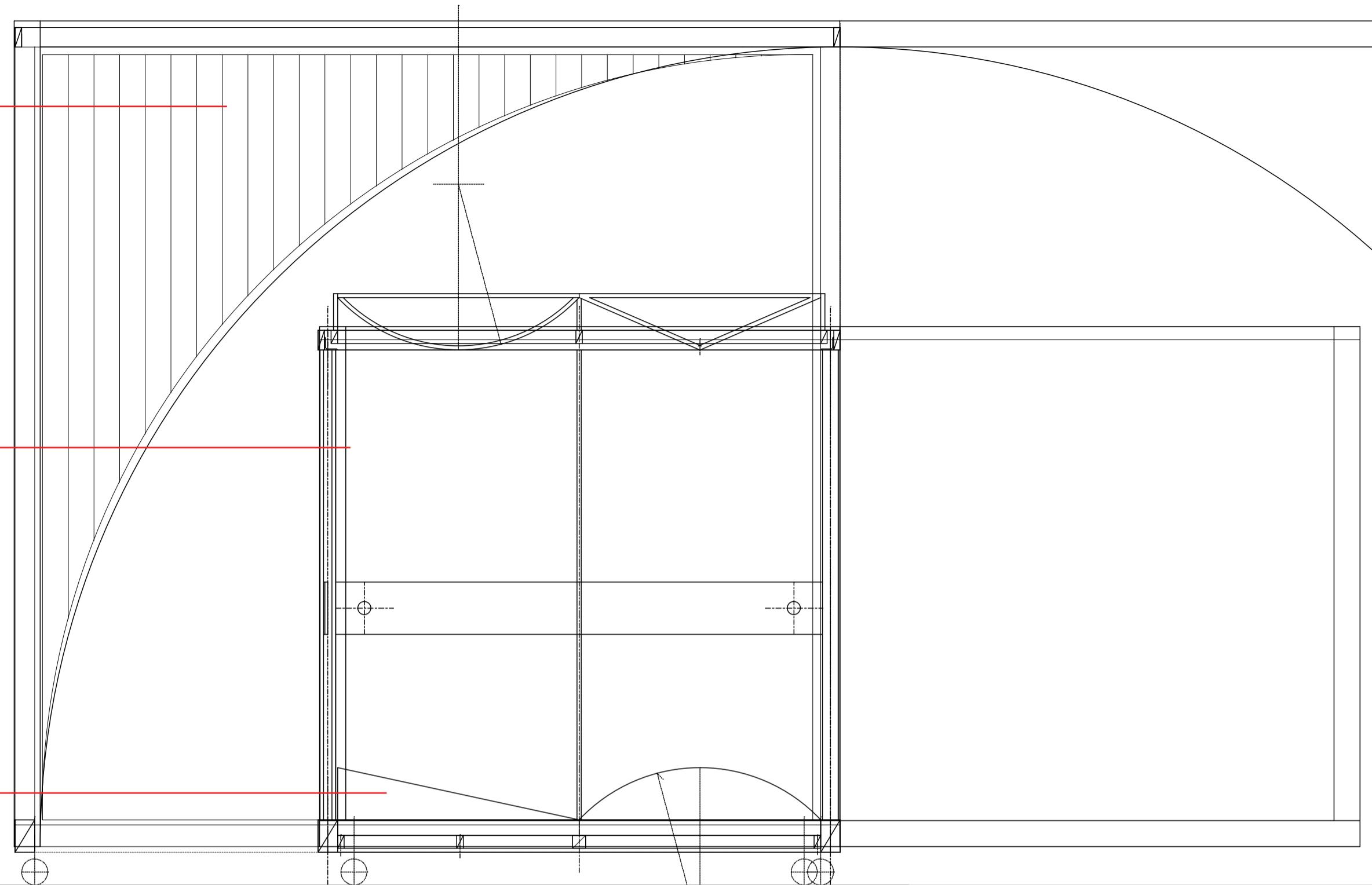
協力：伊勢建築事務所



roof 周辺視  
低周波知覚  
ジスト知覚  
雰囲気

enclosure 垂直軸(視覚)  
高周波知覚  
記号・意味

floor 重力軸(身体)  
マテリアル  
フォーム



荒川修作+マドリン・ギンズニの『意味のメカニズム』に収録されている「エピナールブリッジ」に向けた数々の「プランクファニチャー」のスタディを参照項として、ある種の実験装置として制作したものです。「天命反転量」と、勝手に呼んでいるもの)が置かれた身体軸を揺さぶるフロア、高周波知覚を担う(記号的で意味的な)エンクロージャー、低周波知覚(周辺視や雰囲気、揺らぎ)を担うルーフ、という、あえて分節的なダイアグラムとして(分けた上でつなげる)構成した上で、その重層的な経験の可能性を検証するための装置です(同様な構成で4種類構想しているうちのひとつです)。

荒川+ギンズは「虚構の場所」「プランク(形成するプランク)」「空間(形成する時空間)」が同時生成することを知るためにまずは「起り立つることを組み立てなければならない」と記しています。また原広司はアリストテレスの「場所は境界である」という定義を端緒に「境界は、なんといっても空間の容器性の性質に依拠しており、実際には空間は場としての性格も同時にもつて、そこでは「境界とは何か」をあらためて問い合わせが必要が生じてくる」と述べ、「ダイナミックな場のなかに規定される境界」としての理解を促しています。荒川+ギンズは「ブリッジ」を「この容器ないし発生器は、全く新しい意識の領域である」と捉えていますが、そのあたりが今回の製作の目指すところなのでしょう。

2022年3月のAGxKansaiで、荒川修作のボトムレスI再制作を施工いただいたHOTMETALSOUPの西川恭史さん(およびスタッフのみなさま)に今回も大変精度の高い製作をしていただきました。また伊勢建築事務所さん、西脇畳敷物店さんにご尽力いただきました。ありがとうございました!また京都芸術大学4回生の坂本珠梨さんと森田可友葉さんにもAGxに引き続き大変な作業を引き受けさせていただきました。ありがとうございました。

小野暁彦

